

熊本大学学術リポジトリ

Kumamoto University Repository System

Title	觀風遊記（其一）：雜報
Author(s)	東籬園樵夫
Citation	龍南會雜誌， 5 5： 2 4 - 3 2
Issue date	1897-03-30
Type	Departmental Bulletin Paper
URL	http://hdl.handle.net/2298/4800
Right	

聲をかざりに姉弟みたりが、呼べど答もあら涙の、磯うつ音のすざまじきのみ。

姉は心やさだめけむ。のう弟等よさな泣き玉ひそ。今さらに、海士のたく細くりかへし、千たび百たび悔めばとて、かなしめばとて詮なき業なり。父には離れ、母にはわかれて、なに樂しみに世にながらへん。喃、ふたりとも心に落ちしか、飢にくるしきれもひをせんより、この水に身を沈め、戀しき父うへ、なづかしき母さまの、ねはする處にたづね行かむ。のう、弟らよいざ覺悟せよ、やよ喃。姉は二人の弟を小脇にかゝへて、渚にたかき嵐の上より、浪間を目かけて飛び入れば、花と散り玉と碎くる水烟りを浮世のなごり、姿は消えて逆まく渦は三つ二つ。磯馴松ふく汐風たえて、梢になく鴉の聲かなし。なれぬ冥土の旅の空、あはれはらから、今何處にかさまよふらむ。

觀 風 遊 記 其 一

東 籬 園 樵 夫

筑山の北別に天地あり遙轡其前に當り碧水其後を爲す擬瀟湘の八景其間を點綴し風光到る處壯華ならざるはなし想ふ昔慶長の頃東照宮立て大將軍となり已に海内を戡定して大に江戸城を築くや巧に諸侯を威服し親縁を封じ儒術を崇び利病を探り以て奸雄も其隙に乗する能はざらえめしを爾來代を換ふること十五年を累ぬる三百曾て兵馬の警を聞かざりし所以のもの要するに皆東照宮の諸侯を封する綜理綿密にして親疎新舊相箝制し容易に動く能はざらしめしによると雖ども又親藩たる者皇室の藩屏と爲り天朝を尊み幕府を重じ信を下臣隸に得しによらずんばあらず而して其親藩とは尾張紀伊水戸の三家をいふ余往年水戸に遊んで親しく其地勢風光を觀墟趾を弔ひ聊か筑山の北別に天地あ

るの感を作せし所以なり

茨葉相隔つる僅に刀水一練のみ元より動植飛潛の類を異にし山河其容を改むる等の變異なしと雖ども人情風習言語思想に至ては全然同からざる者あるに驚かすんばあらざるなり蓋し最爾たる嶋國中恐らく本邦の如く風俗言語慣習の區々たるはなかる可し試に地方に遊んで徐に觀察せよ一村一部落を異にする毎に已に大に其相同しからざるを知らむ今日より之を思へば頗る怪むべきに似たりと雖も遡て其上を見れば思ひ半ばに過ぎん蓋し本邦の中古封建を以て制となし大小諸侯區々に割據して施政を異にし及び一脉の連山蜿蜒中央を走り無數の小河南北に流れて大に交通の便を妨げまは其原因の重なるものなればなり

泉源彼にあつて爰に大河を作すは敢て怪むに足らずといへども共に注で大海に湊合するの後獨り一河のみ別に潮流をなし且つ一種特異の水色を保持すと言はゞ誰か之を奇とせざらんや夫れ然り習俗言語意思人情の相異なるは遠く封建時代異政の致す處なりと雖ども今の時に當り共に一天萬乘の主を載き同流の教化に浴しながら尙ほ嶄然世俗と異なるものあるに至ては之をしも別天地と言はすして將又何とかいふべき

其特色とは何ぞや乞ふ少しく之を言はむ然りと雖ども余潛に思ふに大凡そ事に本末あり物に終始あり其末を知らんと欲せば其本を究むるに如かず本已に明かにえて其末暗き者は未だ之あらざるなり故に良醫は其病を問はずして先づ深く其既往を究め以て其病因を治むと聞く余や今實に此良醫の爲す處に倣はんと欲す是れ畢竟讀者をして其所以を知らしむるの徑捷たらんことを信すればなり只恐らくは人其文字を讀で裏面の意味を嘗め給はざらんことを讀者願はくは說者筆舌の勞に酬ゆる所あ

れ凡そ書の何たるに論なく之を讀むに二方あり眼を以て文字を讀む其の一なり意識を以て其意味を讀む其の二なり前者は寧ろ讀まざるの勞なきに若かず後者は須らく實踐躬行す可し諺に曰く論語を讀みながら論語を忘らすとは是れ畢竟眼を以て文字を讀み兼て實踐躬行を主とせざる者を云ふなり此の如きの人は只に自己獨特の見識なきを表白するのみならず問學を輕んじ聖賢を欺く者といはざるを得ず

余や未だ史を究めず只碩學史家の推蔽を待て其相一致せる處を信じて引證となすのみ詮疑符の誹り幸に免かるゝを得んか若し尙ほ正しからざる者あらば君子教誨を吝む勿れ余謹て酒を載せ明教を聞かんと欲するに切なる者なり

抑も水府の祖中納言頼房卿は大御所第十一の御子にして慶長十一年九月廿三日御年四才の時常陸國下妻の地に參らせらる十萬石同十四年十二月廿二日同國水戸の城賜はる廿八萬石十六年三月御元服有て御川左衛門督殿と申正四位下の少將に任じ參議を経て正三位中納言に至り寛文元年七月廿九日薨え玉ふ御年五十九威公と諡す

水戸市藤澤山寺境内に一碑あり

水戸威公以 東照公之少子輔 德川氏而爲 皇室之藩屏後世相續三百年尊 天朝重 幕府臣隸亦皆遵奉遺意不敢失歷明治戊辰之變悲 宗家之顛覆慷慨憤發致死 水戸會津越後等地死凡三百人今年當十七回忌辰親戚故舊胥謀建碑水戸城西常盤村神應寺使余銘之嗚呼余亦遭戊辰之亂間關於矢石之間者臨銘豈無愴然哉

銘曰

何以報 主恩

唯有一死耳

死各異其所

魂同歸桑梓

矧近

藩祖廟

其志乃遂矣

地高而松青

豐碑傳千祀

正四位松平容保篆額

大學教授正七位

南摩綱紀撰

御子光圀四位の中將より從三位に登り家を繼で後參議に列す少時曾て伯夷傳をよみ感ずる處あり大日本史を作て尊王の大義を唱ふ元日毎に遙に天朝を拜するの儀を創む又敕使其邸に行向ふ事あれば必ず自ら其旅館に詣て之を謝し奉る湊川に楠氏の碑を建忠義の氣をすゝむ是れ又奉上の忠を致さんとなり國ゆづりて後水戸城の北久慈郡の西山に居る著編の書尤も多し後西院天皇稱して備武兼文絕代の名士といふ綱吉の初長流に囑して萬葉集を註釋せしむ長流死して契仲之を續成し代匠記を作る其他公の著書としては大日本史禮儀類典扶桑拾葉集等あり

其後相受くること六代皆武を重んじ文を修む中就く第九代從三位權中納言齊昭卿資性忠孝の志深く兼て文武の才を抱き世を愛するの誠を推し幕政の缺を補ひ或は四方に周遊して當時の形勢を見民の疾苦を問ひ忠君愛國の志氣を養成し大に祖業を恢宏す誠に當時の英主たり宋の范中庵嘗て古へ仁人の心を求む物を以て喜ばず已を以て悲まらず廟堂の高さに居て則其民を憂ひ江湖の遠さに處て其君を憂ふと卿の行事を觀遺跡を尋ねるに優に仲庵の此語に當るものあるを覺ゆるなり今其一を思ふに曾て幕府命を傳へて曰く夷狄防禦の事忽にすべからず大砲の備へ用意あるべしと卿宣はく我水戸は土地瘠て民貧く常に財用の足らざるを憂ふ然りと雖ども幕府の命感謝するに餘あり昔松平和泉守は佛を鑄つふり錢と爲せしも我は銅佛銅鐘を以て大砲を造らん海防の爲に土民の膏血を絞るに忍びず乃

ち國中の諸寺に命じ銅佛と鐘とを納めまむ云々
又義公の遺業を紹き大日本史を校修し弘道館を建て戸田忠敬藤田彪等を用ゐ文武を獎勵す曾て會澤
安新論を著はま國體諸事を論辨す是に於て諸藩の志士水戸に遊び勤王の論漸く盛なりしと云ふ行事
多くは斯の如し又其餘を類推するに足る

當時水戸城の西に一公園あり偕樂園と名付く東西凡そ二百間南北六七十間許梅樹を植うるに五千
餘株南の方更に數千歩の芝生あり秋萩或は時樹を並植し春秋の候眺め最妙なり就中萩躑躅をもて壯
觀とす東は常盤神社の境外に接し西は嶮岨にして下に一條の通路を開き櫻川の流に臨む又厓上に十
株の老松ありて其下石造の碁棋將盤二面あり觀客の遊戲に供す號けて仙奕臺といふ此邊に立て東南
の間仙湖を眺望するに碧水渺茫として妙法崎梅戸崎其北岸に沿ひ常盤山の深林に連り三魂ヶ端は東
南にありて濱田の市坊及び藤柄の人家を控へ吉田の社笠原山其南にあり靜寂綠を涵ま又遙に磯濱の
松原を望む頭を回せば西の方綠ヶ岡の蒼松鬱々として櫻川の清流に臨み筑波葦穗の遙響は晚霞の表
に聳へ雲煙常に其麓を繞れり園の中央に一亭あり好文と名付く聞説く景山公山水の淨妙を愛し屢々
此に逍遙して臣僚と鼓腹の樂みを共にすと園の入口に高さ八尺二寸横八尺の一巨碑あり其上六百拾
字の篆書を刻せり碑面靛黒にして文字僅に讀むべし上方に古篆もて偕樂園記の四大字を題せり周圍
に櫻樹の模櫻を畫き背に園中の禁條を掲ぐ共に景山公の選文にまて兼て同公の筆なりと云ふ其文諱
す可し

偕樂園記

天有日月地有山川曲成萬物而不遺禽獸草木各保其性命者以一陰一陽成其道一寒一暑得其宜也譬諸

弓焉焉弓有一張一弛而恒勁馬有一馳一息而恒健弓無一弛則必撓馬无一息則必殪是自然之勢也夫人者萬物之靈而其所以或爲君子或爲小人者何也在其心之存與不存焉耳語曰性相近習相遠習於善則爲君子習不善則爲小人今以善者言之擴充四端以修其德優游於六藝以勤其業是其習則相遠者也然而其氣稟或不能齊是以屈伸緩急相待而全其性命者與夫萬物何以異哉故存心修德養其與萬物異者所以率其性而安形怡神養其與萬物同者所以保其命也二者皆中其蘊可謂善養故曰苟得其養莫物不長也苟失其養无物不消是亦自然之勢也然則人亦不可無弛息也固矣嗚呼孔子之與曾點孟軻之稱夏諺良有以也果由此道則其弛息而安形怡神將何時而可邪必其吟咏華晨飲醺月夕者學文之餘也放鷹田野馳獸山谷者講武之暇也余嘗就吾藩陬涉山川周視原野直城西有閬谿之地西望筑峰南臨仙湖凡城南之勝景皆集一瞬之間遠巒遙峯尺寸千里攢翠疊白四瞻如一而山以發育動植川以馴擾飛潛洵可謂知仁一趣之樂郊也於是藝梅樹數千株以表表魁春之地又作二亭曰好文曰一遊非啻以供他日芟耨之所蓋又欲使國中之人有所優遊存養焉園中之人如休吾心夙夜匪懈既修其德又能勤其業時有余暇也乃親戚相携朋友相伴悠然逍遙于二亭之間或倡酬詩歌或弄撫管絃或展紙揮毫或坐石點茶或傾瓢尋於花前或投竹竿於湖上唯從意之所適而弛張已得其宜焉是余與衆同樂之意也因命之曰偕樂園

天保十年歲次己亥夏五月建景山撰及書及題額

碑文の間公の面目自ら躍如たり余其威風を追想して欽慕措く能はず東坡の言を想ふ君子可以寓意於物と蓋し公の園囿を闢き衆と樂を偕にする所以の者誠に深き寓意あるを知るに足る夫れ四端は人倫の大本たり四端已に擴充し得ば以て四海を保つ可し苟も之を充てずんば以て父母君主に事ふるに足らざるなり公乃ち文武講習の餘暇を以て士庶を會し共に山水風月を樂むの裡一は以て風俗を齊ふ者

禮節を知らしめ一は以て要害の地緩急の備へを爲すの意を寓せる者の如き凡そ一國に君たる者勵精治を求めんと欲せは士庶に親み五品に遜ひ四端を充て人心を正ふするより先なるはなし而も往々意を是に用ゐず獨り手を廣厦の深殿に拱し政を輔相に委ねて自ら治亂禍福の伏する所を悟らず徒に威を衆庶に嚴にして上下を離隔し花晨月夕の燕を肆にして飲食衣服の依て出づる本を思はざる者あり是豈人君の材ならんや抑も國家は君あるが故に民あるに非ず民あつて後乃ち君あり君にして民に用なくんば頂くに足らず民にまて其君を敬せずんば臣たる可からず君々たり臣々たり此の如くにして始て國家あり其相頼り相待つこと輪轂の如き宜なり聖謨の一徹に出づるや景山公の如きは眞に人君の資を供ふる者と謂つべき乎

川田剛先生兼て此園に遊び一詩を留む

明公偉略見遺蹤營得菟裘亦要衡碧水涵天連大海青山排闥耳双峰層櫻曲榭臨平野旌石奇巖倚古松是雖一斑他可識雄藩世五萬提封

有栖川幸仁親王殿下の御詠

いづれよりまつ咲出る色をみんうゑて花待庭のむらさき

世々をへてなほこそまされ類なき君か恵みも花の色香も

雨はるゝ梅の林の露をさへこほして匂ふはなのゆふかせ

夏の頃偕樂園に來て

ますらをのれこしゝ風や殘るらむよのなみならぬ園のすゝし

全

陸 子

忠 子

福羽美靜

菊池爲馨

八重霞吹とく風も匂ふなりわくある梅のみそのふのはる

茶 説

齊 昭

人之於禮不可一日無之也大則邦國之經綸小則閭閻之細務有禮則治無禮則亂雖小枝亦然余暇日爲雲華之枝其中自有禮節廢之則事亦不可行也而其可取者三焉可舍者三焉以易得之器與養得之寶比焉而不耻者所以示以富貴交貧賤也其調蠶食爲美味者所以示以不肖爲賢也其聚古物以玩之者所以示慕古也若夫垢清器傷全物以贗古製者教民僞也匕箸碗盞博之千金果菜魚鳥競致珍異者教民奢也品評器什極口贊揚者教民諛也舍此取彼斟酌以用之可謂善行茶禮者也歟金玉之爲至寶芻豢之爲美味人之所同好也我則不然以凡木爲具以手槩爲羞矣富貴之爲尊貧賤之爲卑亦人之所同然也我則不然貴賤共席而不相褻促膝劇談雖臣子相伍焉是數者吾枝之所厭也質而雅和而不流君子之交也孔子曰禮樂與其奢也寧儉雖小枝其庶幾乎

管子曰く禮儀廉耻は國の四維四維張らずんば國乃ち滅亡すと夫れ茶の道たるや纏繞たる小枝に属すと雖ども亦禮節を知るの一端たり豈多少の補益なくして止まんや苟くも禮節に資するものあらば之を執るに固より巨銖の別なきなり然りと雖ども右茶説の如きは乃ち公が几案の小戲に過ぎざるのみ隨て之を紹介するの要を見ずといへども又其人と爲りを窺ふの緒たるを得ん

要するに水府に君たりし者皆大義名分を倡へ神德以て土民を化し四維以て國勢を張り懦弱の人心を起し内に争畝の民なく外夷蠻をして邊境を汚さしめざらんとするにかく大日本史の書法精神体例を見るも尙ほ其一般を證して餘あり況んや烈公の如き英邁果斷の資に加ふるに襟懷寬弘にして苛ならず急ならず鞠躬精營只た已を勤めんを恕し治に居て亂を忘れず晩年に及で心を老養に委し道義の式

微を歎き講經の館を創むる等誠に一世の英主たるに愧ぢず去れば其遺風深く人氣に入り土民今尙は強堅にまて稍稜峭の氣を帶ぶ時に或は偏執頑固の風なきに非るも寧ろ輕佻浮華の取る可きなきに勝る嗚呼賢豪夢の如く逝て影なしと雖ども只夫れ逝く者は身逝かざる者は靈幸に餘烈遺風筑山の北に存して長に翠色を仙湖に仙波映せり湖

韓 文 公 (承 前)

杏 城 生

第六章 棹尾的運動

(一) 復び朝に立つ

彼が頼みに思ひたる憲宗は逝けり。而して彼も亦寢く老ひんとす。今彼が棹尾的運動は始まりぬ。

然るに京師廟堂今日の光景は果して如何。相結托せる裴度は朝にあらざるにあらすや。彼が親友なる崔群は却けられ出で、節度使たるにあらすや。其他皆彼が黨派を以て任じたるものは、今や一人の廟堂にあるものあらざるなり。滿朝は爲すなきの小人を以て充されたり。而も時勢は彼をして攸々手を袖にして野にあらまひる能はず。憂國の念慮は常に彼が虎を焚かんとす。彼は如何にして朝に入らんとするか。彼は如何にして一身最後の義務を盡さんとするか。當時彼が境遇も又不幸なる哉。

然れども驕奢爲すなき穆宗は幸にまて詞墨を愛する癖ありき。故を以て書に名ある柳公權(公綽の子)は夏州の觀察判官より召されて右拾遺翰林學士となり、弱志爲すなきの元稹さへ、その詩歌の美なるによりて、入て詞部郎中知制誥となれり。遂には愈の親友崔群も湖南觀察使より召されて吏部侍